

# I 学校の概要

## 1 地域の概要

創立は明治10年(1877年)、桃崎・湯ノ谷・大井谷の3カ村が力を合わせて「桃崎学校」を設立し、明治29年(1896年)には、寺谷・和田両村の「寺谷学校」を併合して5カ村の「五郷尋常小学校」と改称した。以来一世紀以上にわたって、この地域の初等教育の中心的役割を果たしてきた。過去130年余りの間に延べ5千余人の卒業生を送り出し、昭和20年(1945年)から30年(1955年)にかけては、学級数12~13、児童数400名以上を記録した経緯がある。以後減少に転じ、昭和60年(1985年)には、ついに100名を割るようになった。この間、校舎は2度建て替わり、現在の校舎は昭和50年(1975年)に建て替えられたものである。

五郷地区は長く山林業で栄えてきた。時代の流れの中で、林業の不振が顕著となり、地域の過疎化、高齢化が一気に進行した。主産業の衰退とともに、保護者の職業も多様化し、最近では市内中心部の事業所へ通勤する人が多くなり、人口の流出・減少に拍車をかけている。平成以降の少子化の影響はすさまじく、20年余りの間に児童数はほぼ3分の1となり、複式学級による授業を展開するに至っている。一方では、市の人口誘致の働きかけが進み、移住される方も増えてきている。校区にも数世帯の移住者がおり、本校には、2家族、児童3名が通学している。

子どもたちの夢を育むため、地域・保護者が一体となり子どもたちの活動を支援し、成長を見守っている。特に、地区合同運動会という大きな行事では、地域の方々のご厚意で運営を賄っている面がある。高菜漬のような特産物やおこん塚など多くの文化財があり、保存や地域振興に力を尽くされたり、田園の一部を学校田として貸借し、稲作体験に力を注いでくださったり、学習を支えてくれる人材は多い。体験を重視した地域教材も豊富である。秋には、保護者、地域の方へ感謝の思いを込めて、収穫祭を行うなどの行事も長く続いてきた。

## 2 児童の実態

現在は、在籍児童数12名、3個複式学級という学級編成である。

本校児童の強みの部分としては、次の点が挙げられる。

- ・自然に囲まれた環境の影響もあるのか全般的に児童は落ち着いている。
- ・与えられた課題は真面目に取り組み、授業は落ち着いて受けることができる。
- ・基礎的な計算問題等の技能は身につけてきている。
- ・少人数であるため、一人当たりの発言や活動の機会が多い。
- ・複式の授業の中で、プリント学習等(間接指導)自分できちんと行うことができる。
- ・タブレットを活用し、自分の進度に合わせた復習、個別学習を進められる。

一方で、弱みの部分としては、次のような課題が挙げられる。

- ・学習に対し受け身的であり、自ら学びに向かおうとする意欲が乏しい。
- ・人間関係が固定化したり、子どもたちの中で独自のルールを作ったりすることで、相手の事をおもんぱかる言動が身につけにくい
- ・筋道を立てて書いたり話したりする力、問いに正対した答えを出す力、論理的に理由を説明したり条件にしたがって記述したりする力が弱い。
- ・複式・極少人数であるため、すぐに相手の意見に同調したり、逆に、自分の思い・考えだけに陥ったりし、互いの意見を深め合ったり、対立させたりする経験が乏しく、自分の考えを練り上げていこうとする意欲が乏しい。切磋琢磨しながら思考を深めていく経験が乏しい。

弱みを克服し強みを伸ばしていくために、小規模校ならではの特色ある教育を展開し、少人数の良さを活かすため、縦割り班での子ども会行事や清掃活動・給食の配膳など、学年を超えて共同して行っている。

今年度については、コロナ禍の影響で多くの行事が中止・見送りとなるなど、子どもたちの楽しみが減るなど、例年になく状況の中で生活を余儀なく送ることになった。また、中学校の在籍生徒が転出したことで五郷中学校が休校となり、中学生に頼っていたこともすべて小学校が主となって取り組む節目の年にもなった。そのような中で、高学年が中心となり活動を行う良い機会にもなった。地区の合同運動会や焼き芋集会、親子レクリエーション（ドッジビー大会）を進め、全校児童が協力して仲良く活動する姿が見られた。



### 3 児童数の推移

年度	R2	R3	R4	R5
全校児童数（名）	12	14	15	17